演題名　実習後学習に求められる要素
～教育工学はソーシャルワーク教育にイノベーションを起こせるか？～

発表者　藤田譲（白鷺病院医療福祉科）会員番号　001508

［目　的］

社会福祉士養成課程において、事前・事後学習も含めた現場実習の意義は決して小さくない。しかし、一連のプロセスを通して、実践力を持つソーシャルワーカー養成にどれだけの貢献をしているのかについては、十分なエビデンスを基に検討されているだろうか。

そこで、本報告では、報告者のソーシャルワーカー・実習担当教員・現任者研修担当としての経験、および教育工学分野における知見に基づき、実習終了後の授業も含めた学生教育、すなわち実習後学習をいかに改善していけるかについて検討してみたい。

［本報告における倫理的配慮］

当日の報告および資料作成にあたっては日本社会福祉学会研究倫理指針に沿った対応を行う。また、本報告に関して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

［実習後学習における課題］

教育工学とは、学校教育や職場での人材育成などにおける、カリキュラムや教材開発までも含めた教育方法、教授法を取り扱っている学問領域である。近年、企業においては人材育成・能力開発が重視されるようになり、また教育機関においても情報技術の進歩に対応した授業、魅力ある授業作りが求められており、幅広い分野において注目を集めている。

その研究成果を調べていくと、ソーシャルワーカー養成に対しても多くの示唆が得られる。いくつか例を挙げてみよう。

１　エビデンスの不在

教育工学においては授業のプラグラミング、教材作り、授業の展開、評価や効果の判定など多くの研究成果が報告されている。しかし、ソーシャルワーク領域では個別的な創意工夫・経験に留まったものが多い。しかも、成果を上げたかのような報告でも、「授業終了時点」の評価であって、その後の進路選択・就職・ソーシャルワーカーとしてのキャリアにどのように影響したかまで明らかにした研究成果はほとんどないのではないだろうか。

２　学生のニーズへの応答

実習後学習に関わっていて困難を感じるのは、「実習に対する省察が生かされるのはソーシャルワーカーになってから」という現実である。つまり、学生にとっては、その前段階にある「自分はソーシャルワーカーになれるのか？」「どの分野に進みたいか？」「就職はできるのか？」という課題のほうがより重要な現実的課題であり、実習はすでに「過去の出来事」のように見受けられる。そこに応えつつ「実習→事後学習→進路選択→就職活動→就職」という過程に沿って、どのような教育を行えば良いのかについては、研究成果も乏しく、まだ養成課程においても共有できていないのではないだろうか。

３　実習後学習に関しての目標の明確化

「ソーシャルワーカーを目指す」という目標は「ソーシャルワーカーという職に就く」ことで達成できるものではないだろう。「今後の学生生活での課題を意識化する」「ソーシャルワーカーという仕事を通してクライエントの役に立つ、社会に貢献する」というように、目標をより明確に、具体的に定めないままでは、実習後学習の内容を検討することも評価することも困難となる。

このほかにも、実習経験の不均一さ、ソーシャルワークに関する知識・技術レベルのばらつき、動機付けの異なる学生の混在などさまざまな課題が見られる。これらの課題が実習後の演習クラスの運営を困難にしてはいないだろうか。

[考察：実習後学習改善の方向性]

以上のような現状に潜む課題を踏まえつつ、教育工学的な観点から主な改善点を検討する。

１　実習後学習も含めた実習教育の検証

新カリキュラムを経てソーシャルワーカーになった「元学生」は、新カリキュラムをどのように評価しているのだろうか？良かった点・改善したほうが良い点を考えるうえで、元学生からのフィードバックは「実践力」を高めるうえで何が必要か？、についての貴重な情報を提供してくれるものだろう。そのためのリサーチは不可欠である。

２　「実践力」の明確化

盛んに用いられる言葉であり、ソーシャルワーク教育におけるキーワードでありながら、いったい何が「実践力」なのかについて、関係者間で明確なコンセンサスは存在しているのだろうか？学習目標設定、授業シラバス策定、教育内容検討のためにも明快な形で「実践力」を共有できるよう検討すべきである。

３　実習前から卒業・就職までの教育内容の検討

実践力の中身が明確になり、実習後学習の改善の方向性が見えてくれば、「実習を終えた学生をどのように教育していけば良いか？」「そのステップとして、個々の授業で何をすれば良いか？」についての検討材料が揃っていくはずである。そうすれば、自ずと実習後の演習クラスにおいて、「何を」「どのように」省察するよう促せば良いか、その過程で学生に対しどのような知識を学ばせれば良いのかも明らかになる。

[結語：今後の課題]

「実践力のあるソーシャルワーカーを養成する」ことは、ソーシャルワークに対する社会からの期待が存在する以上、養成に携わる関係者の社会的責任となったと言えよう。現状への評価とともに改善への取り組みを継続することは、専門職としてのアカウンタビリティの観点からは不可欠ではないだろうか。その取り組みにおいて、教育工学の知見は非常に有用で、ソーシャルワーク教育への適用も必要であると考える。そのことを踏まえての研究・教育の改善が大きな課題であある。

＊なお、本報告における参考文献・資料は当日配布資料に記載する